

視覚障害のある児童生徒への専門性を生かした指導

秋田県立視覚支援学校 教諭 内藤 聡子

Ⅰ 実践に当たって

Ⅰ はじめに

本実践では、文字の読み書きや単眼鏡を使用して板書書写をすることに困難が見られる生徒に対し、「年少弱視児用弱視レンズ応用訓練プログラム」（板書書写）を実施した取組と、PC入力を学習で活用するための取組について紹介する。

2 対象生徒の実態

対象生徒は、中学部2年の男子生徒である。見え方は、次の表のとおりである。

眼疾患名	桿体一色覚、先天性眼振、内斜視（右）、遠視性乱視（両）、全色盲		
遠距離視力	右（0.03）	左（0.07）	両眼（0.07）
近距離視力	右（0.04）	左（0.09）	両眼（0.09）
最大視認力	左（0.3）／4 cm		
視覚補助具	遠用弱視レンズ	単眼鏡　ナイツ　8倍	
	近用弱視レンズ	ルーペ　エッセンバツハ　7倍、10倍	
	書見台、遮光眼鏡使用		

対象生徒は、準ずる教育課程で学習を進めている。読み書きや、板書書写に苦手意識があるため学習進度が遅れており、国語、数学においては、下学年の教科書の内容を学習している。授業では板書を単眼鏡で確認しながら、ノートやプリントに記入する機会も多いが、「文をなかなか覚えられない」と訴えるなど、記憶することを苦手とし、板書書写に時間を要する。そのため、まとめや要点のみを板書するなど、生徒が書く分量に配慮して授業を進めている。また、漢字に苦手意識があり、現在、小学校6年から中学校1年程度の漢字の学習を行っている。各教科の学習や日常生活での必要性を感じ、漢字検定5級取得に向けて学習に取り組んでいる。

Ⅱ 実践内容

Ⅰ 実践Ⅰ 板書書写のスキルを上げよう（6月～10月）

（1）実態

- ・小学部6年までの自立活動で、「遠用弱視レンズ基礎訓練」及び「遠用弱視レンズ応用訓練」、「遠用広視野空間探索訓練」の各プログラムを進めてきており、単眼鏡の基本操作スキルは身に付けている。「遠用弱視レンズ応用訓練」のプログラムの一つである板書書写は、①黒板を見て文章を読み、書いてあることを一時的に覚える、②視線をノートに移す、③既習の字形を想起しながら記憶した文を書く、④再び黒板を見て、新しい部分を覚える、という過程の繰り返しである。そのため、単語や文節のまとまりで記憶して書くスピードを上げることで、板書書写に対する困難さを改善することができると考えた。

（2）指導目標

- ・単語や文節で区切りながら記憶して書くスキルを身に付け、板書をノートに書き写すスピードを上げる。

(3) 指導内容

・板書書写の練習

板書書写の際に必要な、「単語や文節で区切りながら記憶して書くスキル」を身に付け、ノートに書くスピードを上げるために、週1回「板書書写」を実施した。「弱視レンズガイド」参考にして、以下の①～⑤のように段階的に文字数を増やしていき、目標をクリアしたら次の段階に進むこととした。

① 4文字程度の単語（平仮名・片仮名）

・10個の単語を1セットとし、2セットの平均タイムが1文字当たり2秒を切った場合に合格とすることにした。2単語ずつ記憶して書いたり、単眼鏡で見たものを読み上げてから書いたりするなど、一番良い方法を探しながら取り組んだ。（例：イタリア そら ゆうき ゲーム みらい）

② 4文字程度の単語（小学3年生までに学習する漢字も使用）

・小学3年生までに学習する漢字を交えた単語を提示した。漢字は、1単語につき1字とし、目標タイムを3秒に設定した。2単語ずつ記憶して書くやり方の他、1単語ずつ見て正確に書く方法も実施した。（例：早おき ため池 きゅう息 小さい しん友 昔ばなし）

③ 2文節、3文節の短文（漢字あり）

・練習1セット、本番2セットで行った。2文節では平均タイムを3秒、3文節では3.5秒、どちらも8割以上の正解率で、かつ1回で書けた場合に合格とした。漢字は、1文につき2字とした。（例：早く始める。前へ進む。お金を拾う。顔を横における。大きい森がある。）

④ 4文節の短文

・1文につき、漢字を2～3字使用した短文を提示し、目標を3秒に設定した。（例：ケーキを妹と半分にする。週に1回ピアノをならう。）

⑤ 50字程度の文章

・授業を想定し、社会や理科、国語などの小6教科書から題材を設定した。「弱視レンズガイド」の訓練プログラムを参考にし、小学校高学年以上の基準である35点以上（*）で合格とした。（例：ほうりつをつくったり予算を決めたりするのが国会です。国民の祝日も国会で決められています。）

*正確度＝正答率×書字率／100として、得点＝正確度／書字スピードである。例えば、正答率と書字率が100%の場合、1字当たり2.85秒以内であれば、35点以上となる。

(4) 指導の結果

- ・2単語ずつ覚えて文節で書く練習をしたところ、記憶しようという意識が見られ、平仮名、片仮名はほぼ2単語ずつ覚えて書くことができるようになった。
- ・意味を理解しやすい文の場合は、1文を記憶して書いたり、漢字を思い出して正確に書いたりすることができた。少し文節を意識できるようになったことで、合格基準である35点を上回ることができた。また、速く書けるようになりたいという意識が出てきたと感じる。
- ・既習の字形を想起しながら記憶した文をスムーズに書くことを苦手としているため、中学校対応の50字以上の文章や漢字を多く含む文章の板書書写は、記憶して書くことや漢字の習得状況からスピードを上げることは困難であると感じられた。

2 実践Ⅱ パソコンを使ってノートを取ろう（11月～3月）

(1) 実態

- ・ホームポジションの位置や指の役割分担など基本的なキーボード入力スキルを身に付けている。薬指や小指の使い方は定着していないことやキーボード入力のスピードはゆっくりである

ため、授業で活用するためには練習が必要であるが、本生徒が興味・関心をもっているパソコンを学習で活用することで、キーボード入力をスムーズに行い、普段の授業や家庭学習、将来の生活にも生かしていけるのではないかと考えた。

(2) 指導目標

- ・正確さとスムーズなタイピングなどのパソコンのスキルを身に付け、板書書写や家庭学習に活用する。

(3) 指導内容

①キーボード入力の練習

- ・キーボード入力する際、それぞれの指でキーを正しく押さえて入力する練習をする。薬指と小指の動かし方を中心に行う。また、五十音の入力練習をしてタイムを毎回測定する。

②文章の入力練習

- ・教師が読み上げた漢字検定の問題文をキーボード入力する。文節ごとに漢字を変換したり、練習する漢字に下線を引いたりしやすいように、教師は2文節ごとに区切って読み上げる。

③英単語の入力練習

- ・1週間ごとに10～20個程度の課題を出し、毎日スペルとその意味を入力しながら英単語を覚えることを継続する。

(4) 指導の結果

- ・キーボード入力では、左右人差し指をホームポジションに固定したまま中指、薬指、小指を動かすことができるようになった。また、五十音を打ち込み、タイムを計る活動を設定したことで意欲が高まり、回を重ねるごとに入力するスピードが上がり速く打ち込むことができるようになってきた。文章の入力では、2月に受験予定の漢字検定の問題を使って、入力する練習をした。入力しながら、正しい漢字を知ったり、下線を引くなどのパソコン操作のスキルを覚えたりすることができた。
- ・英単語練習では、毎日継続して課題に取り組みキーボード入力がスムーズになってきており、基本的な英単語を覚えることができるようになってきた。また、英語の授業では板書書写の際に、パワーポイントを使い、教科書の本文を入力したり、板書をパソコンに入力したりすることに活用できるようになってきた。

Ⅲ 成果と今後の課題

実践Ⅰでは、「年少弱視児用弱視レンズ基本訓練プログラム」に基づいて、遠用弱視レンズの基本的な使用技術から練習し直し、板書書写の練習を段階的に行ったことで、板書書写のスピードが速くなることに楽しさを感じて意欲的に練習に取り組んだ。生徒から「速く書けるようになりたい」と発言があり、意欲の向上が見られ、板書書写することに対する苦手意識や抵抗感が少なくなってきた。今後は、スピードだけでなく、正確に書くことにも意識を向けていきたい。

実践Ⅱでは、PC入力は生徒が興味・関心をもっていることもあり、進んで取り組む姿が見られた。日常生活や学習活動での活用を考え、将来的にパソコンのスキルを上げていくことの必要性を感じる。特に英単語は、確認のために練習した内容のミニテストを実施したところ、正答率が上がり、少しずつ定着していると感じる。今後、さらに授業や学習に生かしていけるよう、各教科と連携しながら進めていきたい。

参考文献：稲本正法、他（1995年）『教師と親のための弱視レンズガイド』株式会社 コレール社